

「書きたい！書ける！」生徒の意欲を高める授業づくり

— 学び合いを大切に —

西 舘 真 弓¹

現在国語科においては、特に「書くこと」に課題があり、「書く意欲」を高め「書く力」を育てていくことが急務であると思われる。本研究では、「学び合い」「他領域との連携」の二つを視点として具体的な指導の手立てを考え、独自に作成した学習ノートを活用して、「書きたいこと」を思い浮かばせ「書き方」を身に付けさせることで、生徒の「書く意欲」を高め、「書く力」を育てることができることを検証した。

はじめに

平成20年1月、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について

(答申)」（中央教育審議会 2008）が出され、学習指導要領改訂の方向性が示された。その中では、教育内容に関する主な改善事項として、第一に「言語活動の充実」が挙げられ、国語科においても「発達の段階に応じた、記録、要約、説明、論述といった言語活動を行う能力を培う必要がある。」と記されている。さらに、他の教科においても、レポートの作成や論述などの学習活動を充実することが求められている。

「平成15年度小中学校教育課程実施状況調査」（国立教育政策研究所 2005）の分析結果では、国語科における「記述式問題の正答率低下」が、また、「読解力向上に関する指導資料」（文部科学省 2005）では、「出題形式において『自由記述（論述）』に課題がある」ということが指摘されている。県の「平成18年度小学校及び中学校学習状況調査」（神奈川県教育委員会 2007）の観点別平均正答率においても、「書く能力」の正答率は66.4%と、すべての観点の中で最も低くなっている。

こうしたことから、国語科の学習においては「書くこと」に課題があり、「書く力」を育てることが求められていると考えた。

実際に、「書くこと」に対しては苦手意識を持つ生徒が多く、「特定の課題に関する調査」（国立教育政策研究所教育課程研究センター 2006）において、「書くことが好きだ」と回答したのは、中学2年生のわずか30%であった。また、平成18年12月に改正された「教育基本法」では、学習意欲を高めることを重視した第6条が加わった。このような状況の下、「書くこと」でも生徒の「書きたい」という意欲を高めることが急務であると考えた。そこで、本テーマを設定し、どのようにして「書くこと」に対する生徒の「意欲」を高め、

「書く力」を育てていくかということを探った。

研究の内容

1 「書くこと」における課題

「平成15年度小中学校教育課程実施状況調査」の中学校国語科では、自分の考えをただ書くことはできても、「具体的な条件を示されると、途端に書くことができなくなる」生徒の状況が明らかになり、「場面に応じた立場を明らかにし自分の考えを書くこと」が課題であるとされた。また、「読解力向上に関する指導資料」では、「特に、読解プロセスにおいて『テキストの解釈』『熟考・評価』に課題がある」と指摘された。これは言い換えると、書かれている内容を自分の考えと結び付けて解釈したり、テキストそのものを評価したり、読むことによって明らかになった自分の考えを表現したりすることに課題があるということである。さらに、「特定の課題に関する調査」からは、文章の「論理性」や「明確な根拠を挙げること」「自分の考えを持つこと」に課題があるということが明らかとなった。

以上のことから、「書くこと」における課題を次のようにとらえた。

「書くこと」における課題

- 自分の立場や根拠を明確にしなが、条件や目的に応じて自分の考えを論理的に書くこと

2 育みたい「書く力」

上記の課題を踏まえ、四つの育みたい「書く力」を考えた。一つ目は、資料を読んで自分なりの考えを持つこと。様々な情報が満ちあふれている現代社会の中で、資料を読んで理解するだけでなく、それを自分の知識や体験などと結び付けて、自分なりの考えを持つことが求められている。二つ目は、根拠を明らかにして書くこと。明確な根拠を挙げて説明することで説得力が増す。三つ目は、論理的に文章を組み立てること。効果的に自分の考えを伝えるためには、主張や根拠、根拠を支える具体例をどこに入れるかなど、構成を意

1 大和市立上和田中学校
研修分野（国語）

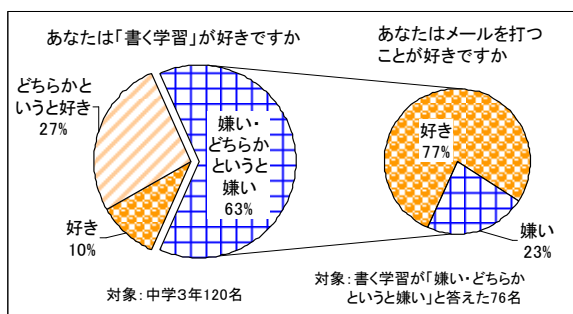
識することが大切である。四つ目は、ある程度の長さの文章を書くこと。PISA調査の結果からは、A4用紙1枚、1000字程度で自分の考えをまとめる力が求められている。本研究では、その前段階として、400字から600字程度の長さの文章を書くことを目指した。

育みたい「書く力」

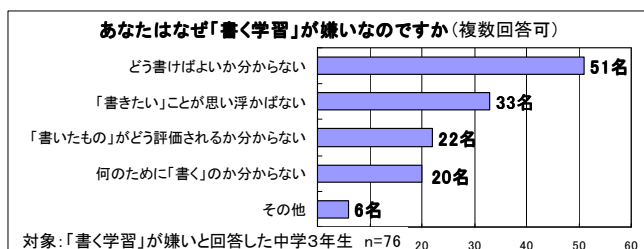
- 資料を読んで自分の考えを持つこと
- 根拠を明らかにして書くこと
- 論理的に文章を組み立てること
- ある程度の長さ（400字～600字程度）の文章を書くこと

3 生徒の実態

3年生120名を対象に、所属校で6月に実施したアンケートでは、「書く学習」が「嫌い、どちらかという嫌い」と答えた生徒が63%に上り、「書く学習」について苦手意識を持っている生徒が多いということが分かった（第1図）。なぜ「書く学習」が嫌いなのか理由を尋ねたところ、「どう書けばよいか分からないから」と答えた生徒が最も多く、続いて「書きたいことが思い浮かばない」という理由を挙げた生徒が多かった（第2図）。ところが、「書く学習は嫌い」と回答した生徒の77%が、携帯電話等で「メールを打つことが好き」と答え（第1図）、その理由として「伝えたいことがあるから」や「自由な表現ができるから」ということを挙げた。これらのことから、生徒の「書く意欲」を高めるためには、生徒に「書きたいこと」を思い浮かばせ、「書き方」を身に付けさせる授業づくりをする必要があると考えた。



第1図 事前アンケート①(6月)



第2図 事前アンケート②(6月)

4 研究の視点

「学び合い」「他領域との連携」、この二つを研究の

視点として大切にしながら、研究を進めた。

(1) 学び合い

本研究においては、「学び合い」について「個々の学び（知識や技能、考えなど）を、互いに共有し交流し吟味し合うことによって、その学びが広がり深まり高まること」ととらえた。他の生徒の新たな視点や異なる考えに触れることで、生徒は「書きたいこと」が思い浮かんだり、より良い「書き方」を学んだりしていく。この「学び合い」を通して、「書く意欲」を高めていくことを一つの視点とした。

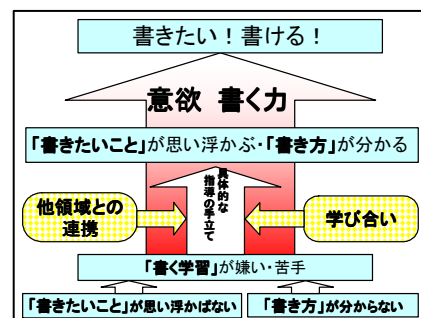
(2) 他領域との連携

「これからの時代に求められる国語力について」(文化審議会 2004) には、「日常の言語生活においては、『聞く』『話す』『読む』『書く』というそれぞれの言語活動が複雑に組み合わせられて用いられているのが普通である。国語教育においても、この点を考慮して、『聞く』『話す』『読む』『書く』という言語活動を有機的に組み合わせることで指導していくという観点が大切である」と記されている。「書くこと」領域と他の領域の言語活動が有機的に結び付いた授業づくりを通して、「書く意欲」を高めていくことを二つ目の視点とした。

5 具体的な指導の手立て

「学び合い」「他領域との連携」という視点を基に、「書く意欲」を高めるための具体的な手立てを考えた。まず、「書けるんノート」という独自に作成した学習ノートを使用し、少しずつ段階を踏んで「書き方」が学べるようにした。また、「赤ちゃんポスト」を意見文の題材として取り上げ、感受性の豊かな思春期の生徒が興味を持ちやすい「命の問題」を考えさせ、「書きたいこと」が思い浮かびやすいようにした。さらに、きめ細かな指導ができるよう、TT(ティーム・ティーチング)を取り入れ、ICT(情報コミュニケーション技術)を活用した授業づくりを行うことにより、一斉授業の際、短時間でスムーズに集中して「書き方」を学べるようにしたり、写真を投影して「赤ちゃんポスト」のイメージが浮かびやすしたりする工夫をした。

第3図は、以上述べてきたことを基に作成した研究構想図である。



第3図 研究構想図

6 検証授業

- (1) 対象 大和市立上和田中学校第3学年
- (2) 単元名 論理の展開(光村図書 国語3)

(3)教材名 説得力のある文章を書こう
意見を主張する

(4)教材の目標

- ①自分の立場や根拠を明確にして、意見文を書くことができる。
- ②異なる立場から意見を見直したり、文章の構成を工夫したりして、意見文を書くことができる。
- ③相互交流を通して、より良い意見文の書き方を学んだり、自分の考えを広めたり深めたりすることができる。

(5)教材設定の理由（なぜ意見文を取り上げるのか）

今回、「意見を主張する」という教材で意見文を書かせる検証授業を行うことにした。意見文は、ある事柄や問題について、立場や根拠を明確にして自分の考えや意見を論理的に述べ、読み手を説得しようとする文章である。こういったことから、意見文を書く学習を通して、本研究での育みたい「書く力」を、生徒に身に付けさせることができると考えた。

また、意見文は構成がはっきりしており、書く内容や順序を例文などで学ぶことができるため、生徒にとっても「書き方」が理解しやすい教材である。6月のアンケートで生徒の73%が意見文を書く学習が「嫌い、どちらか」といって嫌い」と答えたことや、所属校での弁論の学習とのつながりも理由の一つである。

さらに、生徒が上級学校に進んだり職に就いたりしてこれからの社会を生きていく上でも、「自分の意見や考えを持ち相手を説得するために論理的に文章を書くという能力」は、必要不可欠である。

以上のような理由から意見文を取り上げた。

(6)授業計画（8時間扱い）

- 第1次 ○「人はなぜ書くのか」（汐見稔幸）を読み、書くことの必要性や意味を考えさせる。
○様々な課題に取り組み、意見文を書くために必要な力を楽しみながら身に付けさせる。
- 第2次 ○意見文の特徴をとらえさせ、説得力のある意見文を書くために大切なことは何か考えさせる。
○学習のねらいを知り、学習についての見直しを持たせる。
- 第3次 ○立場を明確にした意見文の書き方を理解させる。
○「赤ちゃんポスト」について、立場を明確にして説得力のある（根拠・根拠の説明・異なる立場からの見直し）意見文を書かせる。
- 第4次 ○主張が明確で説得力のある「自由意見文」を書かせる。

- 意見文を読み合い、自分の考えを広げたり深めたり「書き方」を学んだりさせる。
- 学習を振り返り、学習のまとめをさせる。

7 検証授業の分析と考察

(1)研究の視点から

ア 学び合い

同年代同士の影響を受けやすいというこの年代の生徒の特性を生かし「話し合い」「助言」「読み合い・聞き合い」など「学び合い」を多く取り入れた授業づくりを行った。

(7)話し合い

「話し合い」については、ほぼ毎時間班での活動を取り入れ、意見を出し合い考える時間をとるようにした。「みんなで意見を交換し合ったりすることからはじめたことで、意見文を書くことへの抵抗がなくなった」「自分の意見を工夫して説明できるようになったし、相手の意見に興味や関心が持てるようになった」という感想が見られた。これらの記述からは、生徒が「相手意識」や「目的意識」を持って授業に取り組むことで、「書く意欲」が高まったことや、意見を交流する中で「書きたいこと」が明確になり、その考えをさらに深めながら自分の意見を吟味し、自信を持って書くことができたということが分かる。

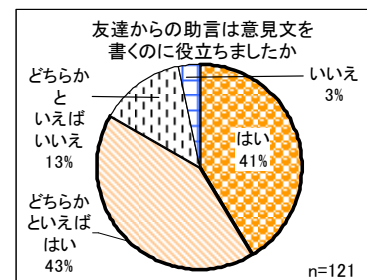
(4)助言

意見文の題材として取り上げた「赤ちゃんポスト」について、その骨組みや清書を書いた後、付せんやノートを利用してお互いの「書き方」について助言をさせた（第4図）。「根拠を支えるための具体例を挙げるべきだ」「『子どもを預かった親がその子どもを殺すこともありえる』という反対意見が考えられるのではないか」など、的確な助言が多く書かれていた。「助言のどなたが役に立ったか」という質問に対して、「反対意見に使う材料になった」「構成をする上で参考になった」「根拠がしっかり書けた」「考えの幅が広がった」という記述が見られた。これらの記述やアンケート結果(第5図)から、生徒が助言によって他の生徒からより良い意見文の「書き方」を学んでいたことが分かる。

また、75%の生徒が「助言によって『書こう』という意欲が高まった」と答えている(第6図)。自分を認め励ましてくれる人がいると



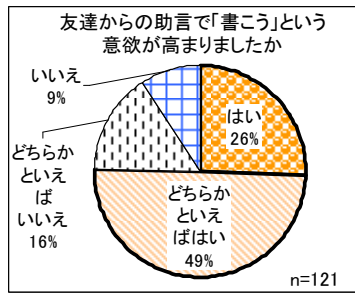
第4図 助言カードを書く生徒



第5図 授業後アンケート①(11月)

いう安心感が「書く意欲」を高めると考えられる。

しかし、25%の生徒は「いいえ、どちらかといえばいいえ」と回答をしている。この理由としては、助言を書く側の問題として、良いところについては書けるが、直すべき点については指摘しにくいということや、受け手側として助言を感情的に受け止めてしまうということが考えられる。このような生徒への手立てとしては、助言がどのように役立ったかを示したり、助言の経験を重ねさせたりすることが有効であろう。



第6図 授業後アンケート②(11月)

(ウ)読み合い・聞き合い

完成した「意見文」は、班やクラスで読み合ったり聞き合ったりした。生徒のノートには「TVで見た体験が詳しく書かれてあり、反対の意見だけれど共感できる場所があった」「親の都合で子を捨ててしまうのは、無責任ではないか」というところや、子の意思が反映されないのではという根拠に説得力があった」という記述が見られた。ここからは生徒自身が一つのテーマについて、様々な視点から考えられることを学び取り、自分の考えを広げたり深めたりするとともに、「いろいろな根拠の書き方」や「反対の立場の意見の根拠の挙げ方と解決策」など、「書き方」も学び取っていたことが読み取れる。

このように、「学び合い」を大切に授業づくりは、生徒に「書きたいこと」を思い浮かばせ、「書き方」を身に付けさせることに有効であり、「書く意欲」を高めることにも効果的であったといえる。

イ 他領域との連携

二つ目の視点として、「書く」だけでなく他の領域である「読む」「話す・聞く」の言語活動が有機的に結び付いた授業づくりを行った。

「読む」活動としては、「人はなぜ書くのか」(教育出版 中学国語3 p.182)を読んで、書くことの意味や必要性を考えさせたり、新聞の投書を読み比べさせて、説得力のある意見文を書くために大切なことを考えさせたりした。また「赤ちゃんポスト」についての意見文を書く授業では、様々な資料の中から必要な情報を採り出し、意見文を書くことに役立てさせた。

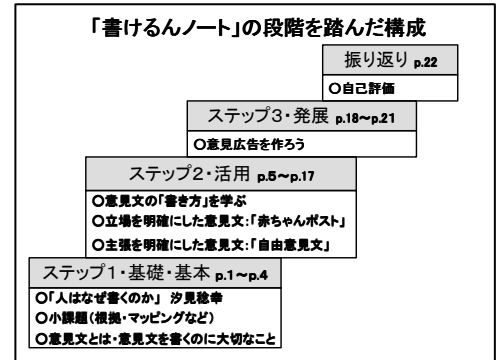
「話す・聞く」活動としては、授業の中で自分の考えを出し合い、話し合う場面を多く設定した。「みんなと話し合っているいろいろな考えられるのが良かった」「意見を聞くのが楽しかった」「意見を伝えて納得させるのが楽しかった」という記述からは、「書くこと」に対して苦手意識を持つ生徒も、他の生徒と話し合いや意見の交流をする中で思考が活性化し、考えが形作られ「書く

こと」が思い浮かび、さらに、「伝え合う」楽しさを実感することで、「書く意欲」が高まっていったと考えられる。

(2) 具体的な指導の手立てから

ア 「書けるんノート」

「書くこと」に対する意欲や力の差が大きい生徒の実態に合わせて、「書けるんノート」という学習ノートを独自に作成した。これは、書くことが苦手な生徒も取り組みやすいように、少しずつ段階を踏んで「書き方」を学んでいけるようにして、「書くこと」に対する抵抗感を少なくするようにしたノートである(第7図)。

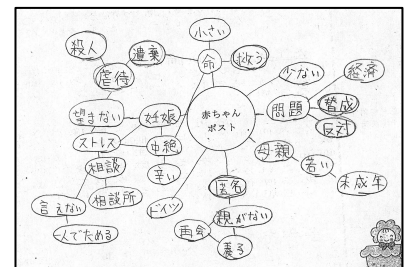


第7図 「書けるんノート」の構成

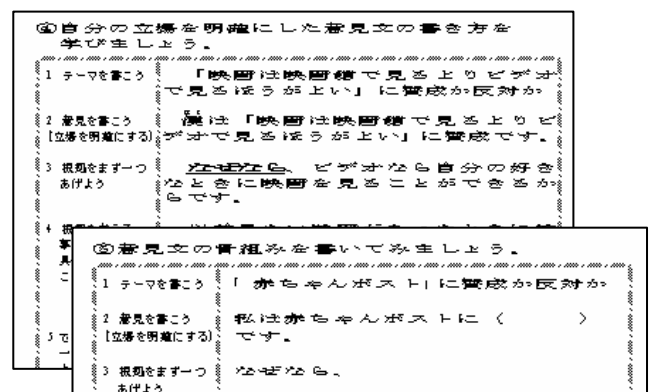
始めの部分には、誰もが取り組みやすく、その後の意見文の学習につながる課題がいくつか用意してある。

次は、意見文の書き方を学び、「赤ちゃんポスト」について、立場を明確にして意見文を書くようになっていく。そこでは、自分の考えを広げるためマッピングに取り組み(第8図)、マッピングやノートに記載されている例文を参考に、意見文の骨組みを書き、それをさらに吟味した上で意見文の清書を書くようになっていく(第9図)。さらに、個に応じた学習が行えるように主張を明確にした自由意見文に取り組めるようにしてある。

また、発展学習としては、意見広告づくりに取り組みるようになっており、「書くこと」が得意な生徒の意欲も高められるようにしてある。

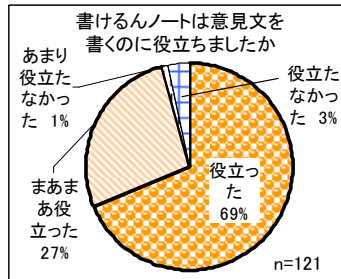


第8図 マッピング(生徒作品)



第9図 例文を参考に骨組みを書く「書けるんノート」のページの一部

授業後のアンケートでは、96%の生徒が「書けるんノート」は意見文を書くのに「役立った、まあまあ役立った」と答えた(第10図)。どこが役立ったかについては、下に示すように「骨組みや書く順序が例文と共に示されていること」や「段階を踏んで考えを深めていけること」により、「意見文の書き方が分かった」という回答が多かった(第11図)。このことから「書けるんノート」の「骨組みや書く順序を例文と共に示した指導」や「少しずつ段階を踏んで学んでいけるような構成の工夫」が「書き方」を学ぶ上で有効であったことが分かる。



第10図 授業後アンケート③

「書けるんノート」のどこが役に立ちましたか？

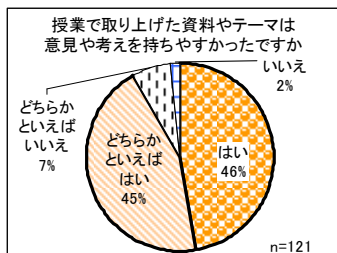
- 意見文を書くときの、骨組みや書く順序(流れ)など、書き方が詳しく書いてあり、意見文の書き方が分かった。書けるようになった。
- たくさん例や例文が書いてあったところ。
- 骨組みを書くところに接続詞が書いてあったところ。
- 段階を踏んで書けるところ。マッピングの部分や骨組みを書くページがあって、それを書くことによって意見文が書きやすくなった。
- いろいろな資料や課題が用意されていたこと。
- 自分の考えとかを書き残せるところ。

第11図 授業後アンケートの自由記述より抜粋

イ 題材の工夫

「書きたいこと」を思い浮かばせるために、意見文の共通の題材として、「赤ちゃんポスト」を扱った新聞を取り上げた。感受性の強い思春期の生徒にとって、「命の問題」は関心をもちやすく、自分たちに身近な問題として受け止めることができると考えた。

『赤ちゃんポスト』について、普段考えることなどないのに、書いてみるとこんなに考えがあるのだと自分でも驚いたし楽しかった」という生徒の感想からも分かるように、生徒達はこの課題に意欲的に取り組んでいた。91%の生徒が「授業で取り上げた資料やテーマは意見や考えを持ちやすかった」と答えたことから(第12図)、この題材が「書きたいこと」を思い浮かばせるのに適切な題材であったことが分かる。さらに、補助資料として3種類ほどの



第12図 授業後アンケート④

「赤ちゃんポスト」についての記事を用意して、「書くため」の材料を豊富に準備したことも、自分の意見や考えを持たせるために有効であったと思われる。

ウ ICT を活用した授業

「書き方」を学ぶ場面ではICTを活用して、短時間に多くの情報を整理して生徒に提示したり、動きのあるスライドを提示したりして、生徒が集中して授業に臨めるよう工夫した。ICTを活用した授業に対して、生徒は「実物の写真(赤ちゃんポスト)などを見られたので、イメージしやすかった。」「言葉で説明されるより流れをつかみやすいし、黒板に書くよりスムーズで分かりやすい。」「黒板では表現できない動く絵などがあって分かりやすかった」などの感想を記していた。ICTを活用した授業は、より分かりやすく「書き方」を学ぶための手助けになったといえる。

エ IT の授業

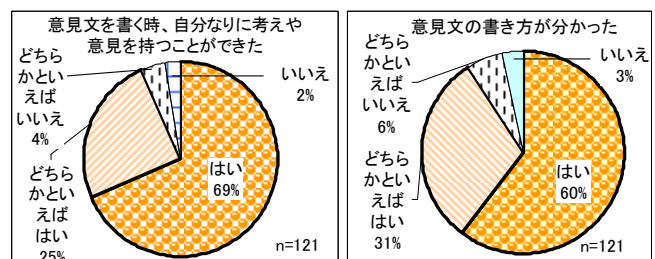
書くことが苦手な生徒に丁寧に対応するため、可能なかぎりITで授業を行った。「先生に質問しやすかったし見てもらいやすい」「二人の先生から視点を変えた助言がもらえて考えが深まる」という感想が多く、86%の生徒がITの授業が意見文を書くのに「役立った、どちらかというど役立った」と答えた。きめ細かな手立てが有効だったということが分かる。

8 研究のまとめ

(1) 研究の成果

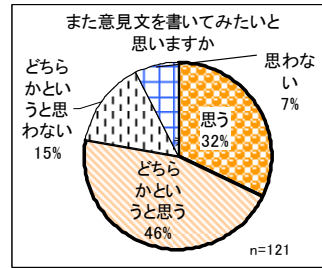
授業後のアンケート(11月)で、「意見文を書くとき自分なりに考えや意見を持つことができた」「意見文の書き方が分かった」ということについて、「はい、どちらかというとはい」と答えた生徒は94%と91%であった(第13図)。授業直前のアンケート(10月)では、「意見や考えが思い浮かばないことが多い」と答えていた生徒が62%、「どう書けばよいか分からない」と答えていた生徒が68%であったことから考えると、今回の授業づくりが、生徒に「書きたいこと」を思い浮かばせ、「書き方」を身に付けさせることに有効であったと考えられる。

さらに、6月には意見文を書く学習が「好き、どちらかというど好き」と答えた生徒は27%であったが、授業後は78%の生徒が、また意見文を書いてみたいと「思う、どちらかというど思う」と答えたことから、本研究における授業づくりは、生徒の「書く意欲」を高めることに効果があったといえる(第14図)。



第13図 授業後アンケート⑤ (11月)

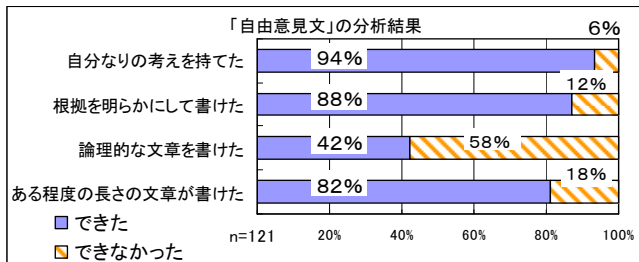
次に、どれだけ「書く力」を育むことができたか、本研究で目指した「書く力」を考慮し、「評価基準」に照らし合わせて、生徒が書いた自由意見を分析し考察した。その結果「自分の考えを持てた」については94%、「根拠を明らかにして書けた」については88%、さらに、「ある程度の長さの文章が書けた」については82%の生徒が、設定した「書く力」に「ほぼ到達できた」と判断できた(第15図)。



第14図 授業後アンケート⑥

しかし、「論理的な文章を書けた」については、42%の生徒しか「到達できた」と判断できず、「反対の立場からの意見の見直し」の部分で論に一貫性がなくなる傾向が見られた。

このようなことから「論理性」には課題が残るものの、概ね本研究で設定した「書く力」を育むことができたと考えられる。



第15図 自由意見文の分析結果

さらに、今回の検証授業について、生徒のアンケートでは「自分の考えをまとめ、そこから広げられる力をつけられた」「考えることが楽しかった」「たくさん考えられた」「他人の意見をよく聞けるようになったし、自分の考えをうまく伝えることができるようになった」「徐々に自分の考えを巡らせることができた」というように、「考える力」にかかわることが多く記述されていた。「『書く』ことは、考えを整理し、考えることそのものの鍛錬にもなる。」と「これからの時代に求められる国語力について」にも記されているように、今回の授業づくりにおける様々な手立てによって、生徒は刺激を受けてじっくり「考え」、そこから「考え」たことをさらに広げ深め整理しながら「書く」ことに取り組んでいたと思われる。さらに、このような一連の過程を通して、「考えること」と「意欲」「書く力」は有機的に絡み合い、「考え」の深まりと共に、「書く意欲」や「書く力」も高まっていったと考えられる。

(2) 今後の課題

「これからの時代に求められる国語力について」の中で、「今後の国際化社会の中では、論理的思考力(考える力)が重要」と記されており、「学習指導要領等の改善について(答申)」(前述 p.1)の中でも、学習指

導要領改訂の基本的な考え方として、「思考力」の育成が挙げられている。国語教育においても、「考える力」の育成が課題の一つになると考えられる。今回の研究から、「考える力」を育むためにも、「書くこと」が有効であると思われる。今後は、意見文だけでなく、説明文や感想文など、様々な形態の文章も含めて学年ごとの「書けるんノート」を作成し、それを活用した授業づくりに取り組むことによって、「書く力」と共に「考える力」を育み、課題の解決を図っていきたい。

おわりに

平成19年度全国学力・学習状況調査の結果について、国語で「書く習慣」を身に付けさせる授業をよく行っていた学校は学力も高いという、「書く力」と「学力」の相関関係が報じられている。今後、一層「書くこと」の指導の充実が求められていくであろう。「書くこと」の指導は、評価も含めて時間がかかるが、継続的な指導のために、指導法やカリキュラム作りの工夫、他の教科との連携の方法を探り、学校教育全体で「書くこと」に取り組み「書く力」を高めていくことを考えていきたい。

引用文献

- 文部科学省 2005 「読解力向上に関する指導資料」
- 中央教育審議会 2008 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/20080117.pdf (2008.1.20取得))
- 国立教育政策研究所 2005 「平成15年度小中学校教育課程実施状況調査」
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター 2006 「特定の課題に関する調査」(<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei/index.htm>(2007.5.10取得))
- 文化審議会 2004 「これからの時代に求められる国語力について」(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/04020301.htm(2007.4.10取得))
- 神奈川県教育委員会 2007 「平成18年度神奈川県公立小学校及び中学校学習状況調査の概要」

参考文献

- 改正教育基本法 2006
- 文部科学省 2007 「平成19年度全国学力・学習状況調査・調査結果について」(<http://www.nier.go.jp/homepage/kyoutsuu/tyousakekka/tyousakekka.htm> (2008.1.28取得))
- 汐見稔幸 2005 「人はなぜ書くのか」 教育出版 中学国語3 pp.182~185